

論考部門

建築と時間

(2014年8月)

内藤 廣

建築と時間については学生の頃から考えていたテーマです。幼い知識で考えていたことを、建築を实践する中で、物の組み立てやディテールに見出そうとしたり、都市や景観に拡大したり、ひとつひとつ当てはめていこうとしています。

建築は実践の場であり、建築は人の暮らしと共にある実学です。わたしは研究者でも哲学者でもありませんから、論理的に美しくまとめることはないはずだし、そのようにまとめる能力もありません。現実はいつも混乱の中にあります。したがって、この大テーマは答えの出ぬままに抱えて最後まで行くのでしょうか。しかし、この問題を脇に置いてしまうと、社会的な枠組みの中で作られる建築は、とたんに資本主義経済に呑み込まれてしまうのも確かなことです。だから、日常を支えている建築的思考から切り離せないのです。

建築が独自の価値を形成することが可能だとすれば、それは時間という価値を親しい友として内包しているはず。わたし自身が、解決がつかないまま、また、無理に解決をつけようとしないうまま、近くに居る友として考えているこの時間について、機会を見つけては文章にしようとしています。建築を志す多くの同志たちと少しでも意識を共有したいからです。

どのみち自分だけでは生きていくあいだにスッキリとした答えは見いだせないでしょう。でも、絶望しているわけではありません。大切なことほどそんなものだ、とも思っているからです。多くの建築家が時間という価値に向き合うようになれば、それはこの国の建築文化の新たなステージになるはず。その時、建築は新たな未来を切り開くことが出来ると思っています。

思いがけず建築と時間に関する拙文に賞をいただくことになり、たいへん光栄に思っています。



内藤 廣 ないとう ひろし

1950年横浜市生まれ。

1976年早稲田大学大学院修士課程修了。フェルナンド・イゲラス建築設計事務所（スペイン）、菊竹清訓建築設計事務所を経て1981年内藤廣建築設計事務所設立。2001～2011年東京大学大学院にて、教授、副学長を歴任。現在、東京大学名誉教授。

主な建築作品に、海の博物館、安曇野ちひろ美術館、牧野富太郎記念館、島根県芸術文化センター、日向市駅、安曇野市庁舎、静岡県草薙総合運動場体育館などがあり、日本建築学会作品賞、村野藤吾賞、ブルネル賞など数々の賞も受賞している。

東日本震災津波の発災以降、岩手県の復興に向け各種委員会の委員を務めるほか、市町村のまちづくり計画の策定支援に取り組んでいる。

論考部門

かたちとサイズ
力感論ふたたび

(2014年11月)

長瀬 正

私は昭和47年から50年にかけて横尾研究室に在籍しましたが、当時の横尾先生の関心は既に力感論を離れ、その後の講演でも歴史や心理、生物といったテーマが多く、先生から力感論を直接にお聞きした記憶は残念ながらありません。

私と力感論との出会いは、昭和53年の横尾先生退官記念出版の建築構造随想におさめられた一連の論文随筆でした。その後、大学での構造講義や唐招提寺金堂保存修理などを担当して、構造のしくみを構造の専門家以外に説明する機会が多くなり、構造を身近に感じてもらい、数式を使わないで感覚で解き明かすことを模索した結果、力感論に至りました。

横尾先生の力感論は重力が主たる対象ですが、棚橋先生は地震などの水平力に対するサイズ効果を論じておられます。両先生の構造センスとユニークな着眼に改めて驚かされます。

建築学会は「建築に関する学術・技術・芸術の進歩発達をはかり、もって社会に貢献することを目的とする」と謳っています。日本の建築は主に研究者（学術）、エンジニア（技術）とデザイナー（芸術）の3者が担当し、それに社会が加わります。震災のたびに、エンジニアの社会性が問われ、分かりやすいコミュニケーションの欠如が指摘されます。他者の共感を得るにはまず理解してもらうことが必要です。新しい気付きと理解は感動を生み、共感へとつながります。

「でっかいものはすごいぞ」特集の小論が、読者と選考委員の皆様から評価いただいたのは、サイズの問題を60年以上前の力感論で解き明かす試みに感動、共感されたものと喜んでおります。

ありがとうございました



長瀬 正 ながせ ただし

1950年兵庫県神戸市生まれ。

1975年京都大学大学院工学研究科（建築学専攻）修了、同年株式会社竹中工務店入社、2014年竹中工務店退社、同年4月より一般財団法人日本建築総合試験所上席調査役。

主な受賞

1997年第8回JSCA賞「シーホークホテル&リゾートの構造設計」、2010年日本建築学会賞（技術）「国宝唐招提寺金堂の保存修理における構造解析を中心とした科学的手法の展開」。

博士（工学）。